

# 大牧古墳群

編集 各務原市埋蔵文化財調査センター  
発行 各務原市教育委員会  
TEL (058)383-1123  
平成15年3月20日



大牧1号墳出土甗(左)・高杯(右)

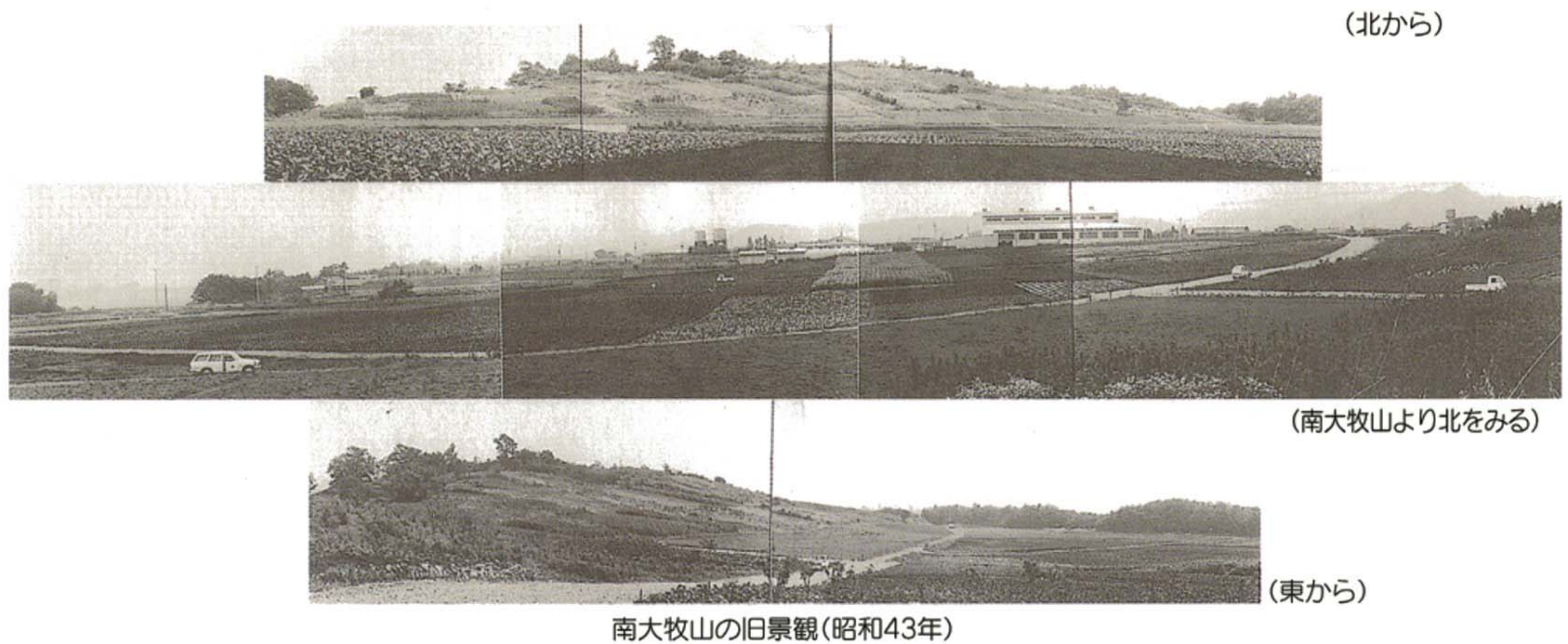
## 木曾川北岸の大規模古墳群

各務原台地の南縁部が木曾川に向かって半島状に突き出す先端に、北大牧山と南大牧山とよばれるふたつの丘陵があります。現在では、北大牧山は市立陵南小学校の校庭となり、南大牧山は住宅団地となって大きな変貌を遂げていますが、かつてはこの周囲一帯に、大牧古墳群と呼ばれる古墳時代後期の群集墳が分布していました。

昭和初期の調査によると、大牧古墳群は4つの

グループに分かれて分布しています。北大牧山に分布する一群では6基の古墳が確認されており、南大牧山では30基の古墳が確認されています。そして北大牧山の西側の台地上に25基、南大牧山の西側の台地上に15基と、ふたつの丘陵とその北側の台地を合わせて合計76基の古墳が分布していました。しかし、調査が行なわれた時点で、すでに滅失していた古墳の数も少なくないと





南大牧山の旧景観(昭和43年)



北大牧山の大牧1号墳(西から・昭和43年)



大牧古墳群航空写真(昭和23年)

考えられますから、古墳の実数は100基に及ぶと想像されます。

### 大牧1号墳とふな塚古墳

大牧古墳群の所在地は、現在の各務原市鷺沼大伊木町3丁目から4丁目にかけての地域ですが、そこにかつての古墳の姿はほとんどみることができません。わずかに陵南小学校の校庭にある「大牧1号墳」と、大牧団地西側の台地にある「ふな塚古墳」がその面影をとどめています。

大牧1号墳は、直径30mの後円部に形骸化した短い前方部が付く全長約45mの前方後円墳と考えられます。昭和57年の発掘調査では、後円部から横穴式石室が発見され、玄室には家形石棺が置かれていました。大牧1号墳の特徴は、墳丘の

大部分が自然の丘陵を利用して構築されていることです。中心となる横穴式石室は、地山を掘り下げて構築されており、地山面より上の盛り土部分には石室の天井石があるのみです。そのため、南にむかって開く石室の前庭部には、さらに地山を掘り下げた墓道がのびており、その先端部は台地の斜面を下って木曾川の河川敷まで到達していたと考えられます。

発掘調査以前の段階では、地表に表れている墳丘はその一部にすぎなかったために、当初、大牧1号墳は直径20mほどの円墳と考えられていました。しかし、発掘調査の結果、周囲に幅約5mの周溝を巡らせていることが判明し、しかも墳丘の西側では周溝が「くの字」状にくびれて前方後円形を呈することも確認できました。ただし、

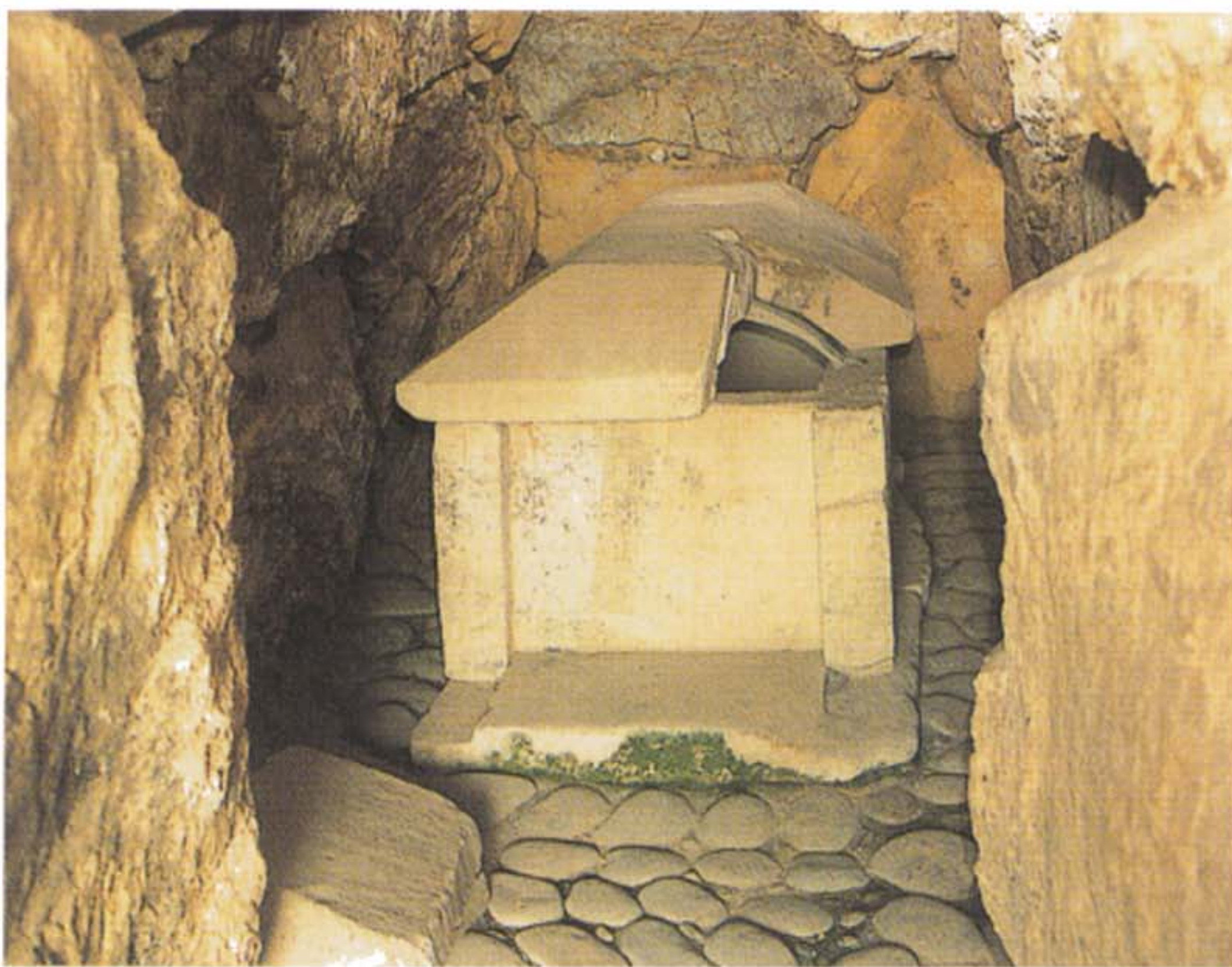




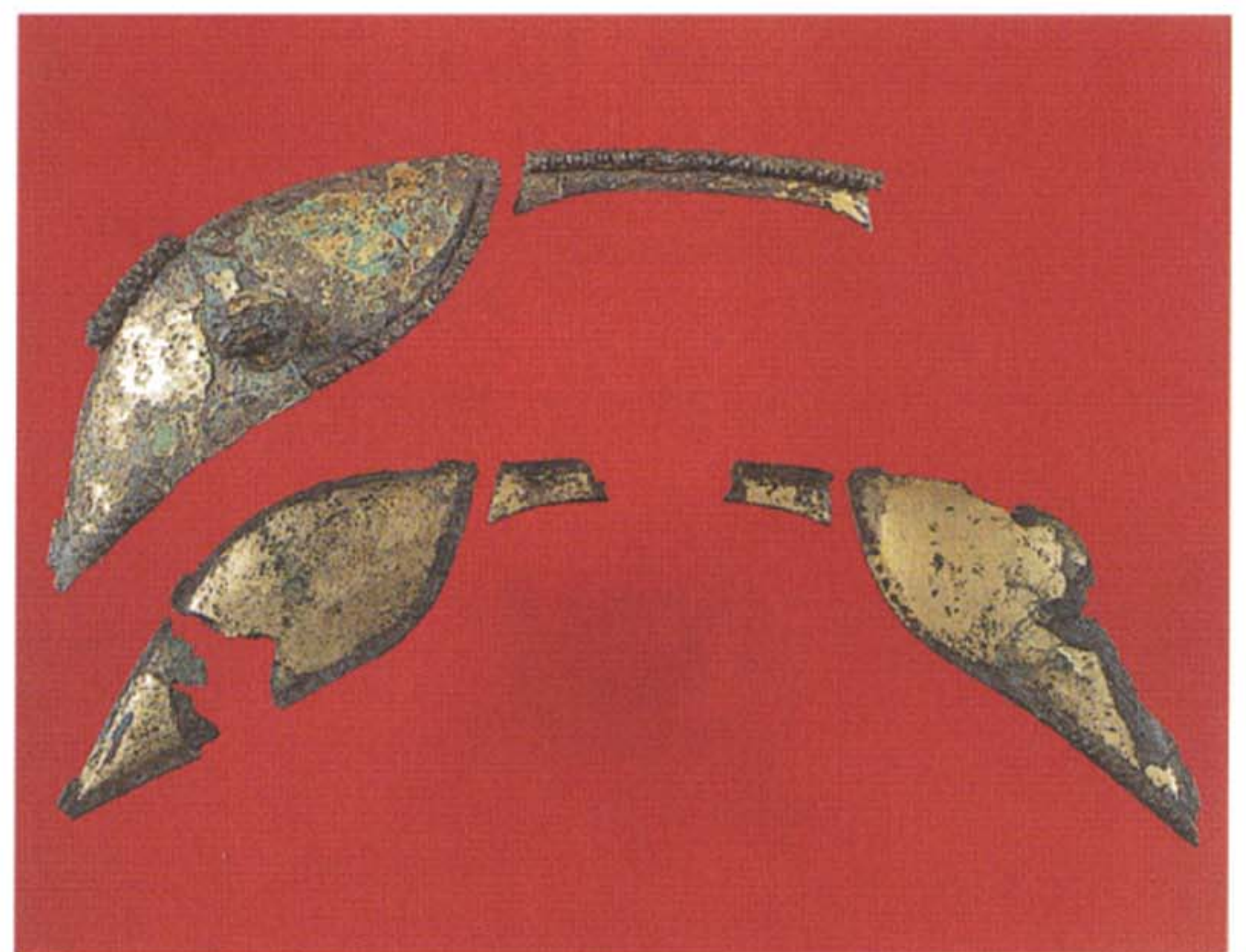
大牧1号墳全景(発掘調査時)



大牧1号墳出土須恵器



大牧1号墳家形石棺



大牧1号墳出土馬具

前方部に相当する部分は、人工的な盛り土はまったく認められませんでした。おそらく、自然の丘陵のたかまりを周溝で区画することにより、前方部のような効果をみせていたのでしょう。

横穴式石室や家形石棺の規模、そして出土した副葬品の豪華さに比べると、こうした衰退形式とも考えられる墳丘構造には矛盾がありますが、大規模古墳を築くうえでの省力化、あるいは大型石室の構築上の問題であるのかもしれませんが。さらには当時、古墳築造に対してなんらかの制約が加わった可能性も考えられます。

ふな塚古墳は後円部の直径約30m、推定全長45mの二段築成の前方後円墳です。前方部と後円部の2段目には外護列石とよばれる川原石積みの葺石がみられます。規模からすると

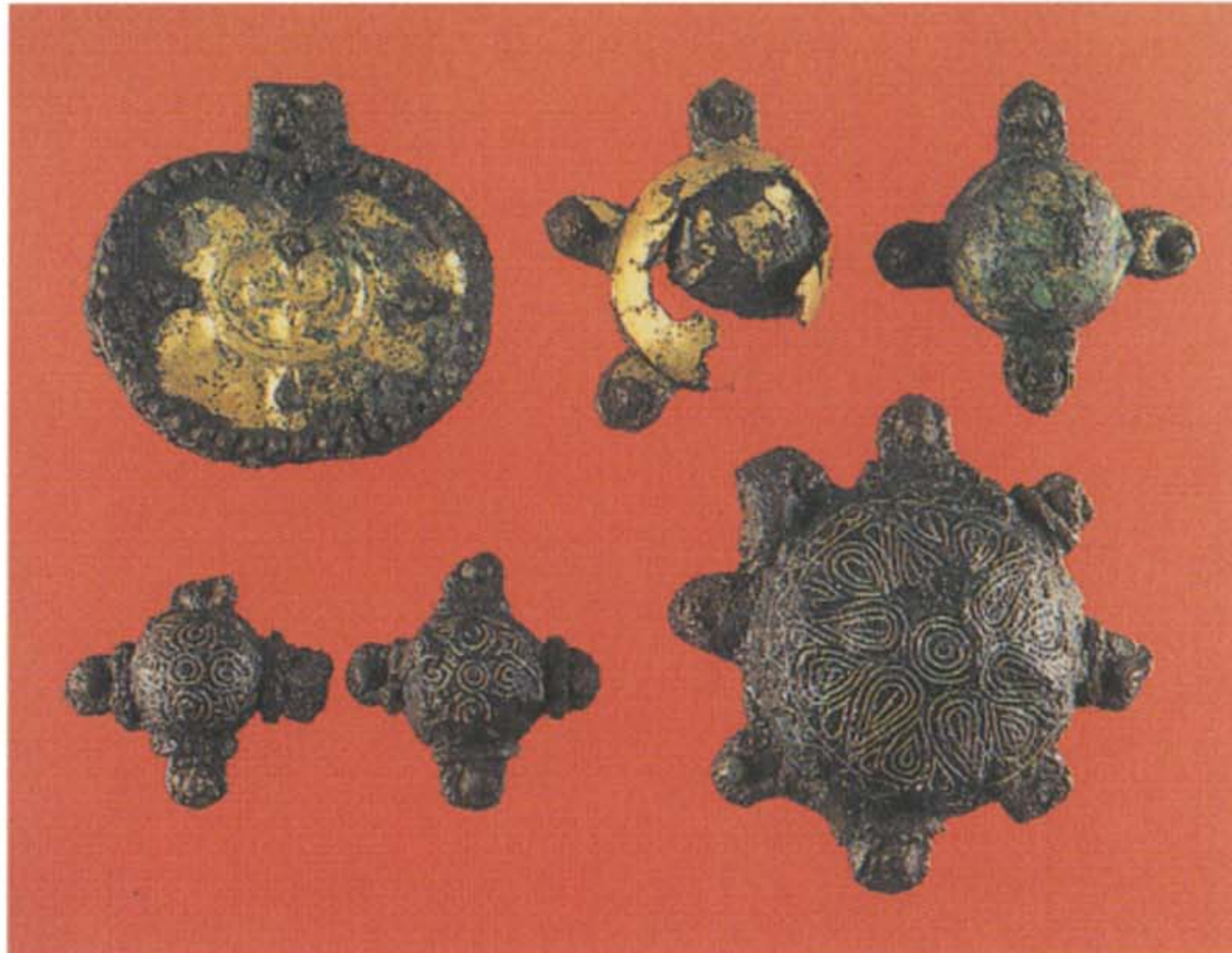
大牧1号墳とよく類似しています。大正時代に後円部の大部分と前方部の一部が壊されましたが、昭和59年の発掘調査では、あらたに前方部から横穴式石室が発見されました。

石室は西にむかって開口し、玄室内には大牧1号墳と同じく家形石棺が置かれていました。しかし、残念ながら崩落した天井石によって、ほとんど原形を留めないほどに潰れていました。

### 大牧古墳群の規模

大牧古墳群そのもののはじまりはあきらかではありません。今からおよそ1500年前の6世紀前半に築造が開始され、7世紀後半までの約200年間にわたって続いたと考えられます。その間に様々な大きさの古墳が造られており、大牧1号墳

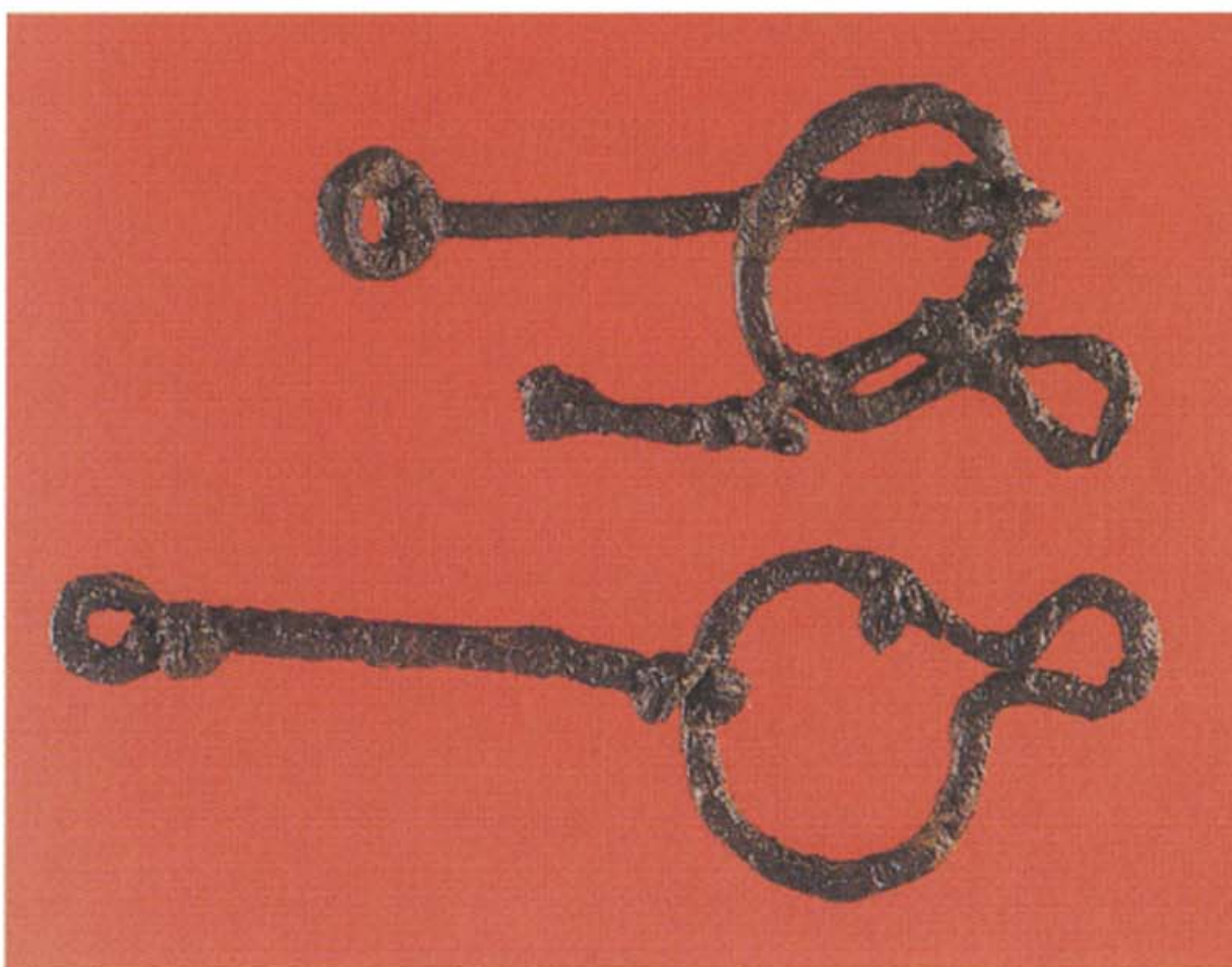




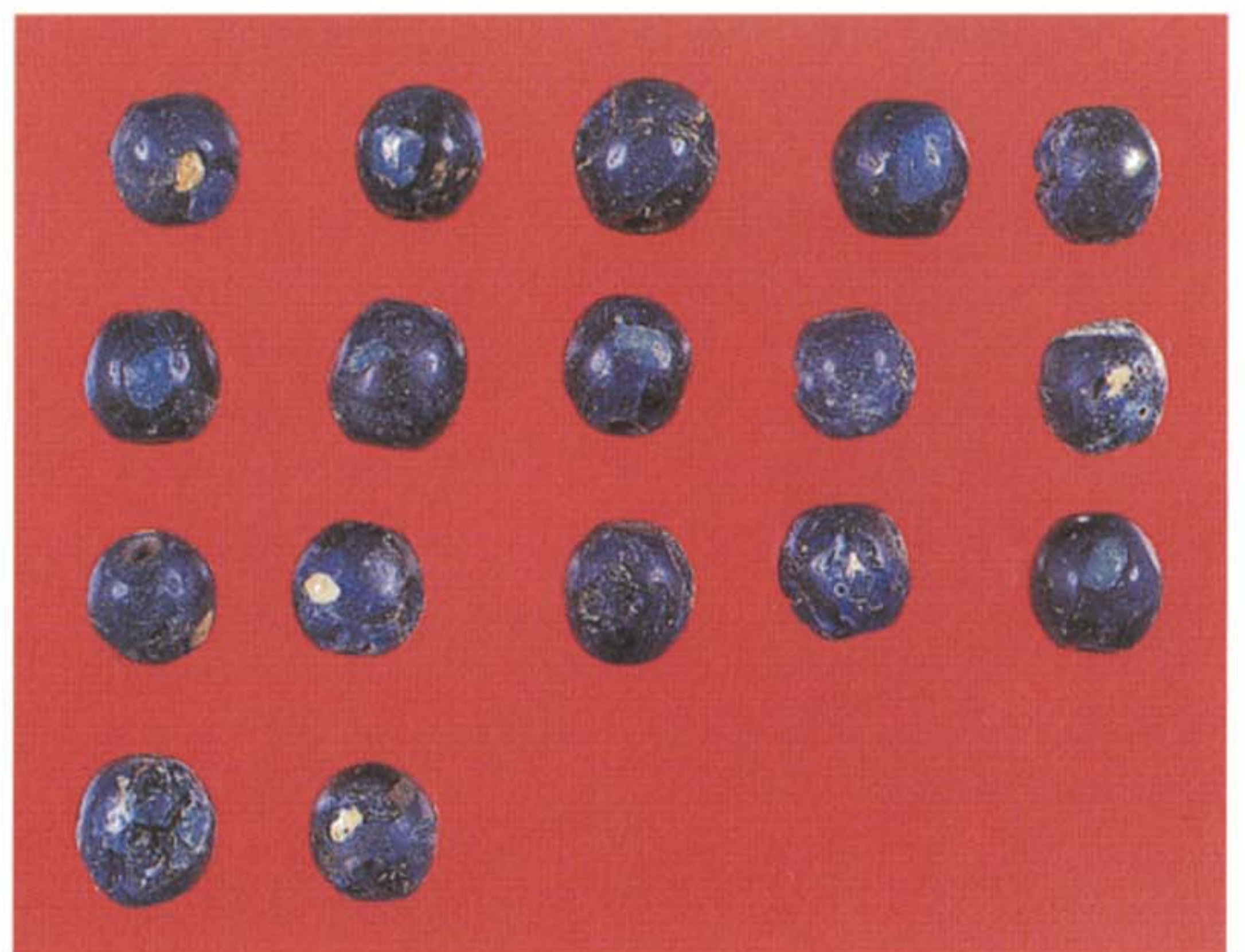
大牧1号墳出土馬具



大牧1号墳出土刀子



大牧1号墳出土馬具



大牧1号墳出土トンボ玉

やふな塚古墳のような前方後円墳もほかに数基存在していたことが推定できます。昭和初期の調査で規模が判明している59基の古墳についてみると、直径が7 mから16 mの古墳が53基と全体の9割を占めていますが、それより大型の古墳は18 mが2基、20 m・22 m・24 mが各1基、そして40 mが1基と、その数が極端に少なくなっています。大きな古墳になるほど、それを築くために大きな政治力や経済力が必要となるので、これは当然といえば当然のことです。ちなみに、40 m規模の古墳とは現在のふな塚古墳のことですが、大牧1号墳については、その位置は記録されていますが大きさは記入されていません。自然の丘陵と一体となってあまり目立たなかったのかもしれませんが。

### 大牧古墳群の実態

古墳の大きさが、その古墳を築いた人物の力の大きさを表すとすれば、少なくとも18 m以上の古墳を築いた10人前後の人々が、当時、大牧古墳群を代表する力を持っていたと考えることができます。ただし、そうした人々と、その他の多くの小規模な古墳を築いた人々との関係がどのようなものであったのかはよくわかりません。後世の武士社会のような主従関係しゅじゅうかんけいだったのか、あるいは一族や集団のなかでの地位の違いなのか明確な答えはでていません。

また、そこで注意しなければならないことは、たとえ大牧古墳群全体で100基の古墳が存在していたとしても、それは6世紀から7世紀にわたる約200年におよぶ期間に造られた古墳の総数





大牧2号墳全景



大牧3号墳全景



大牧2号墳出土須恵器



大牧3号墳出土土師器

であり、いつの時期にどれだけの古墳がどのような順序で造られていったのかがわからないことです。10基前後の大型の古墳が一度に造られたのか、あるいは約200年のあいだに、ある程度継続的に造られていったものなのか、その実態もよくわかっていません。

しかし、少数ながらも発掘調査が行なわれている5基の古墳では、大牧1号墳が6世紀末、大牧2号墳・大牧3号墳が7世紀後半、ふな塚古墳（大牧4号墳）・大牧5号墳（円墳・直径16m）が6世紀後半の築造です。また、そのほか畑の開墾<sup>かいこん</sup>によって発見された大牧6号墳と大牧7号墳の年代が6世紀末であることから、大牧古墳群は6世紀後半の時期に多くの古墳が築造されたと考えて差し支えないと思われます。なお、

大牧2・3号墳は、台地の斜面を利用して築かれた横穴式石室墳のため、墳丘の規模は不明です。

大牧古墳群は、前述のようにその内部は支群とよばれる4つの小古墳群に分かれており、それぞれの支群のなかに2～3基の大型古墳と多数の小型古墳が存在しています。こうした状況について、大胆な推測ではありますが、1基の小型古墳（径7～16m）に表されるひとつの家族があって、それが複数集まってひとつの家族集団（小古墳群、あるいは支群）を構成していると考えます。そこには群の中心となる1～2基の大型古墳（径18～24m）が存在していますが、そうした小古墳群がいくつか集まって、大牧古墳群というひとつの氏族集団<sup>しぞくしゅうだん</sup>（大古墳群）が構成されているのです。大牧1号墳やふな塚古墳は、その大きさから





ふな塚古墳全景



ふな塚古墳家形石棺



ふな塚古墳出土馬具「杏葉」



ふな塚古墳出土須恵器

して氏族集団全体を代表する首長とその家族の墳墓ではないでしょうか。

## 古墳と地域社会

古墳時代後期とよばれる時代には、日本全体に数え切れないほど多くの古墳が造られていますが、大牧古墳群の歴史的意義は、そうした多くの古墳のなかでも重要です。

まず、その立地をみると、大牧古墳群は木曾川北岸の各務原台地の南端に位置しており、木曾川とその流域に開けた南方の沖積地を見渡すようにして存在しています。しかも、かつての木曾川の流路は、現在のように堤防で固定されたものではなく、網の目のように流れて台地の直下にまで達していたと考えられますから、大牧古墳群が

所在する南・北大牧山周辺は、木曾川の河川交通の要衝として、あるいは美濃と尾張を結ぶ渡河地点として、極めて重要な場所だったと考えられます。

大牧1号墳とふな塚古墳は、墳丘内部に遺体を埋葬する横穴式石室を構築しています。横穴式石室は、古墳時代前期の<sup>たてあなしきせきしつ</sup>堅穴式石室とは異なり、追葬という後から亡くなった家族も葬るための石室ですが、ふたつの古墳にはそうした形跡がなく、当初の埋葬だけだったようです。

玄室には大型の家形石棺が置かれており、あきらかに通常の横穴式石室とは規模が異なっています。石棺の石材は、<sup>ぎょうかいしつ きがん</sup>凝灰質砂岩という木曾川上流の可児市で採れる独特の石です。おそらく彼の地で製作され木曾川を下して運んだものでしょう。大牧1号墳の家形石棺は長さが2.4 m、幅が1.2 mと





大牧5号墳横穴式石室



大牧6号墳出土須恵器



大牧5号墳出土須恵器



大牧7号墳出土土師器

美濃では最大の石棺です。一方、ふな塚古墳の家形石棺は、長さが2.10 m、幅が0.9 mと大牧1号墳の石棺に比べてやや小型ですが、やはり美濃では最大級の石棺です。

ところで、大牧1号墳からは、馬具や武器類のほか、「挂甲」という騎乗に適した甲冑が出土しており、ふな塚古墳からは、過去に後円部の大部分が削られた際、優れた金工技術で作られた馬具の「杏葉」が出土しています。当時の美濃において最大規模の古墳を築造し、貴重な馬具や騎乗用の鎧を保持する大牧古墳群の首長たちの性格は、軍事的集団を統括する武人そのものといえるのではないのでしょうか。そして、その軍事力の基盤となるものは、木曾川における河川交通の要衝を掌握するという政治的・経済的な要因とともに、

約200年間にわたる大牧古墳群の存続にみられるように、強固な集団構成を維持しうる集団の強い紐帯だったのではないのでしょうか。

### 古墳を造った豪族たち

ふな塚古墳と大牧1号墳の時期的関係を見ると、大牧1号墳は石室から出土した須恵器の年代が6世紀末頃であり、ふな塚古墳は前方部の石室から出土した須恵器が6世紀末から7世紀初頭頃です。しかし、実際には削られた後円部にあったと考えられる石室が古墳築造当初のものであるから、ふな塚古墳の築造は6世紀末以前にさかのぼることになります。さらに、ふな塚古墳の後円部から出土した杏葉の製作年代が6世紀前半にさかのぼる可能性もあることから、ふな塚古墳は



大牧1号墳よりも古い6世紀後半に築造された可能性もあります。

正式な前方後円墳であるふな塚古墳の後に、その衰退形式のような大牧1号墳が築造され、さらにその後、ふな塚古墳の前方部にあらたな横穴式石室が造られたと考えますと、そこには、大牧古墳群で前方後円墳が造られなくなってゆく過程が表われているといえるのではないのでしょうか。そこにどのような要因があったのかはわかりませんが、この時期は全国的にみても前方後円墳の築造が停止する時期に相当していますので、前方後円墳が造られなくなる理由には、大牧古墳群とその周辺地域の事情だけでなく、全国的な社会情勢が関わっているものと考えられます。

畿内では6世紀末に蘇我氏の手によって日本最古の本格的寺院である飛鳥寺が建立(588年)され、その後、7世紀以降になると多くの寺院が建てられるようになりました。また、何世紀にわたって中央・地方を問わず支配者の代表的墳墓であった前方後円墳が消滅し大型方墳が出現するのも、この6世紀末から7世紀前半のことです。



可児市次郎兵衛塚1号墳

美濃では可児市次郎兵衛塚1号墳をはじめ、垂井町南大塚古墳、関市池尻大塚古墳など、やはり7世紀前半代に大型方墳が相次いで出現しています。そして、平成12年には各務原市鵜沼西町において、それまで確認されていなかっ

た一辺20mの大型方墳が発掘調査されました。鵜沼西町古墳とよばれていますが、現在は発掘調査後に宅地造成により埋め戻されていてみることはできません。しかし、それまで前方後円墳が消滅してから、7世紀後半に蘇原地区において古代寺院が出現するまでの間、有力な古墳が不明だった各務原地域に大型方墳が存在していたという事実は決して小さくありません。

大牧古墳群を形成した氏族集団は、ふな塚古墳や大牧1号墳などの前方後円墳が消滅したあとも、大牧2号墳や3号墳などの小規模な古墳を築造し続けており、集団自体が衰亡したわけではありません。各務原地域における大型方墳の出現は、当地域にあらたな有力氏族集団が登場したことを物語るものであり、先来の有力集団に加えて、当地域の重要性がさらに高まったことの表れといえるでしょう。

大牧古墳群の最盛期は、ふな塚古墳や大牧1号墳が築造された6世紀後半から7世紀初頭にかけての時期ですが、この時期は、日本の歴史においても重要な時期であったことがわかります。朝鮮半島の大加耶滅亡(562年)による日本の対外政策の動揺や、蘇我氏の勢力台頭とそれに村する物部氏らの没落(587年)、東日本への国遣派遣(589年)による国境確定の動きと、遣隋使派遣(600年)というあらたな対外政策の推進など、日本の古代社会が大きく変貌する時期に相当するのです。

大牧古墳群を形成した人々が、当時の日本の社会でどのような役割を果たしていたのかわかりません。しかし、最後の前方後円墳を築造するとともに、約200年間にわたって古墳を造り続けた地域の有力な集団が、こうした日本の歴史の流れと無関係であったとは言えません。記録には残らない日本の古代の歴史を築き上げてきた人々であったことはまちがいないでしょう。